

## 長田多美子さんに送る（まずは、御安心を!?)

永 田 豊（地球物理学教室）

ようやく水槽実験室が整備できたのにもなって、この1月より7号館地下に移転しました。今まで3号館の2階で、狭い部屋で水をこぼさないように気を使って実験をしてきた私や、私が直接指導している大学院学生にとって実に嬉しいことではありますが、おやめになる直前に引越という重労働を余儀なくされた長田さんには、まことに迷惑な話ではあったらと思います。しかし引越作業の期間中も研究活動やその他の仕事をほとんどストップさせることなくすませられたのは、長田さんの有能さと責任感に負うところが大きく、またこの間嫌な顔1つされなかった（見せなかった？）のは長田さんの人徳と云うべきでしょう。しかし、『新居』に移ったとたん下手な『贈る言葉』などを書く、今度は本当に嫌な顔をされるのではないかと心配です。

長田さんは最初、私の先々代の日高孝次先生の研究を助けられていました。先生は電子計算機出現の直前に、数値実験の草分け的な大仕事をされた方ですので、研究助手たる者は朝から晩まで手廻しのタイガー計算機を廻すことになり、これは大変だったらと思います。日高先生と云う方は

その威厳のある顔に似合わず仲々ユーモアのあった方で、何かの研究会で『先生、その結果は私には理解できません。計算違いじゃないのですか？』と随分失礼な質問をした人に、『そうですかな。これは長田さんが計算したんですがな。』といってプイッと横を向いてしまわれました。質問者が納得したような顔で引退たのは一種の『呼吸』と云うものかもしれませんが、長田さんがいかに計算のエキスパートであったかを物語る逸話ではありません。もっとも、タイガー計算機のエキスパートがいかなるものであるかは、修士論文を書くのに $13 \times 13$ の複素行列の逆行列を手で解かなければならなかった私位の年配者しか解らないかも知れません。

日高先生が海洋研究所に移られたあと、しばらく今筑波大学におられる高野健三先生と仕事をしておられたと思います。その後、講師に昇格したのを機会に私が長田さんと一緒に仕事する機会を得て、今日にいたっているわけです。最初の頃、頼んだ仕事が私の予想よりずっと速くできあがるので、無尽蔵に計算の種を思いつかれた日高先生のような才能の無い私はすぐ種切れになり、よく

『何もすることが無いのですか』と寂しそうな顔をされたのを覚えています。そこで思いついたのが、面倒なので誰も手をつけない観測資料の整理の仕事です。今でこそかなりの観測記録はオンラインでミニコンにぶち込んでしまうようになりましたが、当時海の水温鉛直分布をガラスのスライドにアナログ的に記録するMBTという器械があり、そこに面白い現象が一杯記録されているのですが、普通は標準層の値を読み取った後は倉庫行きになります。これを気象庁や水路部の倉庫から掘り起してきて、水温の逆転層の特性を統計的に調べたのです。この仕事に5～6年はかかったと思いますが、これはその後の私の主要研究テーマの1つである海洋微細構造の研究の端緒となったものです。実はほとんど忘れてしまっていたのですが、今回の引越に際して読み取りカードがミカン箱に4杯以上も出てきて、『ひゃあ、やっかいな仕事をやったものだ』とあらためて自分ながら感心した次第です。

もちろんこのようなデータの読取・整理・統計

だけでなく、ちょっとした計算、電子計算機へのインプット、結果の作図・製図、英文タイプから日本語ワープロ、そうしていわゆる秘書の仕事一般と、長田さんの仕事は時とともに広がり、私の仕事は長田さん無しで成立たないという形になってしまったわけです。少々しゃくにさわるのですが、他人の目からもそう見えるらしく、『おい、4月からどうするんだ』と心配してくれる人が随分といます。『なに、俺だって事務能力もあり、結構器用なんだぜ』と答えることにしていますが、『しかし、お前の悪筆が読める人は他にいないから、お前だけでなくまわりが非常に困るだろう』と云われると返す言葉に困ります。と云うわけでこのところ一生懸命ワープロを練習中で、この文章もワープロで書いている次第です。まあこのぐらいできるのですから、少なくとも悪筆の問題は解決した。先のことは何とかなるだろう、ケセラ・セラ、『まずは御安心を』というのが現在の心境ですが、さてどうなりますことやら。